

マルティネルの街角で

YKI 国際特許事務所 弁理士◇葦原 エミ

Vol.11 カルチャーショック

ヨーロッパで世界地図を見たときの衝撃は忘れられない。日出づる国 我がニッポンが、世界の中心にないっ!!! どころか、ちっちゃ〜く右の端っこにある。

この瞬間、「極」「東」の意味が初めて分かった。英語だとかわいく the Far East だが、フランス語だともっと日本語に近くて Extrême-Orient。「すげー東」って感じ。

「そうか、この人たち、私をずっと、とお〜〜〜く地の果てから来た人だと思っていたんだ」と実感した。

思えば、これが筆者の最大のカルチャーショックだったといえましょう。

フランスの語学学校で中近東の生徒たちから、「我々は Orient の仲間だよな!」と言われて、仲間であるのは一向に構わないんだけど、「ちょっと『Orient』の範囲が広すぎじゃない?」と思ったことがある。でも、とにかく欧州を中心に考えた「近東」「極東」の概念に、後から「中東」が加わって、要は欧州が中心で、その右側(=東)の国はみんな「Orient」なのだ!

日本でポ〜っと生きてきた筆者には結構衝撃。

「自分の常識が通用しない現実を目の当たりにして、『えっ、違うの!? ガーン!』となること」

をカルチャーショックと呼ぶ(筆者による定義です)。

そしてカルチャーショックから学ぶことは非常に多い。少なくとも自分の想像力の乏しさを実感させられる。

「違うことを考えている人たちがいるんだ」という事実を突き付けられて、その後はたいい「許容」か「嫌悪」になってしまうけれど、筆者はカルチャーショック体験に対してポジティブだ。

思い出す限り、第2のカルチャーショックは、日仏学院(現:アンスティチュ・フランセ東京)のカフェ。美しく三つ揃えを着こなしたハンサムなフランス紳士が、カフェで食事をしていた。「フランス流マナーを学ぶわっ」と、大学生だった筆者は、紳士に注目!そして、見た!

皿に残った卵の黄身とソースを、パンでび〜〜〜とすくって、パクッと食らう紳士の姿を!

「ええっ!? それっていいんかい?」

100年の恋も冷めてしまいそうな光景に、一瞬どんびいた。でも、それ以来、皿のソースはきれいにパンで拭って食うようになった。

人種差別というものもカルチャーショックの1つなんだろう。パリ・シャンゼリゼの土産物屋。店員と楽しくおしゃべりしていたら、経営者らしきマダムがやってきた。「そんな日本人、適当にあしらっておけばいいのよ」。

筆者の相手をしていた店員は凍り付いた。「マ、マダム、お客さまはフランス語が分かります」

今だったら、店の前に半日立って、入店しようとする日本人に対して「この店は日本人をバカにしていますっ!!!」と営業妨害ぐらいはしてやるところだが、当時は悲しさでいっぱいになりながらその店を去った。

でもね、日本でも同じようなことは結構ある。外国人の友人と日本で行動するたびに、「外国人であるというのは大変なことなんだね」と思う。

カルチャーショックを受けたら、「なんでだ!」と否定せず、とりあえず受け入れてみよう。そこから、きっと新たな世界が見えてくる!。。。かも?



※ 撮影協力: デリリウムカフェトキヨー(霞が関)